

## 平成 28 年度「考動力」作文コンテスト・大学生の部

発行日 平成 29 年 3 月 31 日 (金)  
発行元 関西大学教育推進部  
ライティングラボ  
西浦真喜子・小林 至道  
毛利 美穂・吉崎 裕子

関西大学教育推進部は、伊丹市教育委員会のご協力のもと、大学間連携共同教育推進事業「(考え、表現し、発信する力)を培うライティング／キャリア支援」(以下、本取組と表記)の高大連携事業および広報活動の一環として、平成 25 年度より毎年、「考動力」作文コンテストを開催してまいりました。本取組の最終年度である今年度は、高校生の部 1,172 作品(小論文部門 531、ショートショート部門 641)、大学生の部 133 作品(小論文部門 127、ショートショート部門 6)と、過去最多の応募数となりました。応募者ならびに関係各位に厚く御礼申し上げます。

応募作品の選考は、ライティングラボ特命教員(西浦真喜子先生、小林至道先生、毛利美穂先生)を中心に、本取組企画運営部会の教職員(中澤務先生、岩崎千晶先生、木元隆文氏、竹中喜一氏、宮田将氏)とライティングラボ TA、さらに、教育開発支援センター(CTL)長の田中俊也先生、神戸市立工業高等専門学校講師であり CTL 研究員でもあります林田定男先生、教育推進部特命教員であり同じく CTL 研究員でもあります千葉美保子先生、CTL 研究員の佐々木知彦先生、の計 36 名で行いました。ご応募いただいた作品は、テーマ設定においても文章表現においても実に多様であり、多くの審査員が悩みながら選考を重ねました。その結果、小論文部門で優秀賞 2 作品、ショートショート部門で優秀賞 1 作品をそれぞれ選出するに至りました。

### 【小論文部門講評】

小論文部門では、本コンテストが求める小論文を「自ら問いを設定し、問いに対する自分の答えを述べ、なぜそう言えるのかという理由について、客観的な根拠をもとに筋道を立てて説明し、読み手を説得させる文章」と定義しました。テーマは、「〇〇を良くするためには」であり、〇〇を各自が設定し、タイトルを自由につけることとしました。さらに、「他者の意見や調査データを必ず文章内に引用すること」を要件に加え、近年問題とされているインターネット上の文章における剽窃や情報源の偏りの問題を考慮し、「ウェブの情報のみではなく、

### 小論文部門・優秀賞

#### 「小学校を良くするには」

福仲葉衣さん(関西大学文学部1年)

#### 「世界の人種差別問題を良くするためには」

宮原知子さん(関西大学文学部1年)

本、論文、新聞記事などを含めて 2 種類以上の情報を用いること」という条件を設けました。

第 1 次選考では、引用された文献が 2 種類以上あるかを基準とし、ラボ特命教員が評価しました。第 2 次選考では、ラボ特命教員、CTL 研究員、本取組企画運営部会の事務職員が、「資料の取り扱い」「自分の意見」「全体の構成」の 3 つの観点を中心に、ルーブリックを用いて 5 段階で評価しました。最終選考ではこれらの観点到「オリジナリティ」を加えて、ラボ特命教員、中澤先生、岩崎先生、田中先生、林田先生の 7 名で選考しました。

「資料の取り扱い」では、引用している文献の種類、引用箇所の記述の仕方が要件を満たしているか、さらに引用すべき箇所適切な文献を引用できているか、という点を評価のポイントとしました。「自分の意見」では、文章を通して自分の言いたいことを明確に述べているかに着目して評価しました。「全体の構成」では、はじめに自分が設定した問いについて述べ、その問いの答えとなる意見を、文献を引用しながら論証し、おわりに自分が設定した問いの答えを示す、という文章の流れが整っているかを評価しました。最終選考では、「オリジナリティ」として、テーマ設定がありき

たりなものではなく、独創性があるかを評価の観点に加えました。

今年度の応募作品は、文献の引用方法を細かく指定したこともあり、引用自体はよくできていました。小論文を書くために、さまざまな資料にあたり、取捨選択を経て文章に引用していました。その反面、自分の意見が不明瞭なものやもう一方踏み込んだ意見を求めたくなるものが多くありました。小論文を書くにあたり、まず「自分が何を主張したいのか」を明確に定めてほしいと思います。そのためには、大学で受けている授業や日常生活における観察力がものを言います。本や論文、新聞などから社会が抱える問題や講じている対策を知ることにも有益です。現代ではインターネットを活用して非常に多くの情報が得られます。その中から自分がどの情報を選び、テーマに据えて小論文を書いていくのかを決めることが肝要です。

またそこから、テーマに対するさらなる分析や深い考察が求められます。簡単に答えの出ない問題に対して、いかに多くの情報を組み合わせて答えを導き出していくか、じっくりと取り組むことが必要になってきます。大学の勉強とは、まさにその繰り返しであり、その結果、「自分の意見」が形成され、オリジナリティも備わります。

最終選考まで残った作品も、きちんと文献を引用して文章をまとめられていましたが、まだ考察の余地があることは否めませんでした。このような議論を経て、残念ながら最優秀賞は選出されませんでした。

今回の応募者は1年生が多かったこともあり、オリジナリティのある自分の意見を形成するところまでたどり着くのは難しかったのかもしれない。しかし、今後の大学生活を送る中で、今回の小論文を書いたことをきっかけに、大学での勉強がどういうものかを考え、行動に移せるようになってほしいと審査員一同願っております。

それでは、入賞作品の講評を述べます。

優秀賞の福仲さんの作品「小学校を良くするには」は、序論で問題の背景を述べ、本論で論文や調査データを用いた論証を行い、結論で問題に対する

答えを書く、というように文章全体の構成が大変優れていました。論証部分で適切な根拠を用いているため、読み手がすんなり納得できる主張へと展開できていました。一方、内容面では「少人数制」についての主張がすでに多くの現場で議論されているものであり、ややオリジナリティに欠ける印象を与えました。しかし、それを逆手に取ると、「少人数制」の導入や教師の業務過多について長年議論されているのに、いまだに議論され続けているのはなぜか、という疑問に至ります。あくまで1つの視点ですが、その点に注目して文献を読み解いてみると新たな主張が見えてくるかもしれません。

同じく優秀賞の宮原さんの作品「世界の人種差別問題を良くするために」は、「資料の取り扱い」が高く評価されました。人種差別の歴史的な背

景について論文を根拠に説明し、人種差別が残る現状を良くするために、本の記述を引用して自分の意見を説得力のあるものにした点は素晴らしいものでした。しかし、根拠とした文献が古く、また、主張された内容が、観念論や精神論に帰結する可能性もあることから、もう一步踏み込んだ言及を求めたくなりました。人の行動を変えるには、もちろん意識や考えにアプローチすることが有効ですが、やはりそれだけでは変わらないのではないのでしょうか。差別は良くないことだと多くの人が思っていながらくらない現状に対して、もう少し新しい文献を読んで考えてみるのも良いと思います。

それでは、作品と入賞者の喜びの声をご覧ください。

---

## 【小論文部門優秀賞】

### 小学校を良くするには

関西大学文学部1年 福仲葉衣

小学校は多くの人が本格的に勉強をスタートする場所である。小学校で勉強が嫌いになってしまうと大人になっても勉強を好きになれず学習意欲が失われてしまうのだ。そこで、私は小学校を勉強しやすい環境にするため1クラスを20人未満の少人数制にするべきだと主張する。

文部科学省の調査では2015年の小学校の1学級の収容人数が26人から30人が26.8%、次に31人から35人が24.5%となっている。そして、13人から20人の少人数クラスは7.5%である(文部科学省 2015)。このように今の小学校は多人数のクラスが多い。小学校のクラスを20人以上にすると、1人の先生だけでは子どもたち1人ひとりを丁寧に見るには限界がある。目立つ子どもばかり見て、大きく自己アピールできない子どもは先生

に注意が向けられないのだ。自己アピールできない子どもが勉強に苦手意識を持っていても先生から注意を向けてもらえずに勉強が苦手なままである。

しかし、小学校のクラスを20人未満の少人数制にすれば、先生は1人ひとりの子どもに目がいきとどき丁寧に指導できる。村上英子等の調査では、少人数クラスによってつまづいている子の支援など子どもたちの学校活動をより充実させ、教師の個に応じた多様な援助ができるようになったとある(村上 2005)。少人数クラスによって自己アピールできない子にも教師の目も行き届きやすく丁寧に指導できるのである。また、人前が出るのが苦手な子どもも多人数クラスより少人数制のクラスのほうが前に出て自分の意見を発言しやすい。少人数クラスで発言していくうちに積極的になっていくはずだ。

加えて、少人数制クラスは先生の負担も減るのだ。先生の1週間の勤務時

間は、小学校の教師で授業18時間49分、授業の計画や準備に8時間43分、授業以外の子どもへの指導が5時間13分、保護者対応1時間22分、会議など4時間08分、事務業務6時間58分で合計45時間13分である(愛知教育大学 2016)。これは労働基準法32条で示されている一週間の合計労働時間40時間を超えていることになる。その上「休日(勤務を要しない日)に家で仕事(授業の準備など)をする時間」は小学校で平均1時間52分となっている(愛知教育大学 2016)。少人数制にすれば先生の負担を少しでも減らせるのだ。先生の負担が減り余裕ができることによって子どもに割り当てられる時間が増えるのである。

小学校のクラスを少人数制にすることで、勉強のスタートの段階でつまづくことが減り学ぶことが楽しくなるはずだ。人生で初めて本格的に勉強を始める場所が小学校なので、子どもたち1人1人を丁寧に指導していくことが大切なのだ。少人数制によって自

己アピールできない子でも積極的に  
なることができる。先生にも余裕をも  
って子どもたちを指導できる環境を  
作るためにも小学校のクラスを少人  
数制にすべきだ。

#### 参考文献

・愛知教育大学教員の魅力プロジェク  
ト(2016)「教員の仕事と意識に関する  
調査」  
[http://berd.benesse.jp/up\\_images/research/HATO\\_Kyoin\\_tyosa\\_all.pdf#search10](http://berd.benesse.jp/up_images/research/HATO_Kyoin_tyosa_all.pdf#search10) 10月2日閲覧

・文部科学省「学校調査」

<http://www.garbagenews.net/archives/2014321.html> 2016年10月2日閲覧

・村上英子 杉江修治「少人数クラス  
を生かした主体的学習の工夫」2005  
年

#### 福仲さんの喜びの声

この度はこのような素晴らしい賞を頂けて、とても嬉しく思っております。自分の作品が選ばれるなど思っていなかったので、選ばれたと知らされた時は本当に驚きました。

私は両親が教員をしているので、幼い頃から教員という仕事に憧れを持っていました。普段から家庭で教育現場の問題を耳にしている、問題を解決するためにはどうすれば良いかという両親の話を聞いていました。なので「〇〇を良くするためには」というテーマを見て、すぐにテーマが決まりました。両親の話の中の問題と解決方法をもとに書き進めました。書いていくうちに両親の意見に自分の意見が加わり、自分は将来こういう教育をする教師になりたいという将来の理想像が確立することができました。

今回で私は自分の将来の理想像を確立させることができました。今回の賞をいただいた経験を糧に将来の理想像に近づいていけるよう頑張ります。

#### 【小論文部門優秀賞】

#### 世界の人種差別問題を 良くするためには

関西大学文学部1年 宮原知子

最近、イスラム国等の過激派組織によるテロ行為の多発によって、イスラム教徒に対する偏見や、米国における白人警察官による無実の黒人の射殺など、以前から解決すべきだとされてきている人種差別問題が勃発している。

確かにこの人種差別問題は根が深く、完全に解決できるものではない難しい問題であるが、そう結論付けるだけでは解決の一步は踏み出せない。私は、それぞれの人種がお互いを尊重しあい、肌の色や国柄、宗教だけでみるのではなく、その人自身の中身をみて対応すべきであると考え。また、一人ひとりが自分に誇りをもって生きるということが重要であると考え。米国の人種差別問題を通して、どのようにすればこの問題を少しでも解決へ近づけることができるのか考えていきたい。

そこで、まず初めにそもそも黒人差別はなぜ起きているのかということ

を述べておきたい。黒人はもともと奴隷貿易によってアフリカから取引されて米国本土へ渡ってきた。小川

(1970)によると、ヴァージニアを中心とした古い南部地方で煙草の栽培が行き詰り始めたとき、アパラチヤ山脈を越えて、アラバマ、テネシー、ケンタッキー、ルイジアナ、ミシシッピなどで綿花の栽培が非常な勢いで拡大し、その際に雇用賃金の安かった黒人が大量に奴隷として雇われるようになったことがわかる。こうして、南部地方から黒人の奴隷制度が広まりを見せ、黒人差別へとつながった。そんな彼らは南北戦争、公民権運動を通して徐々に、自分たちの地位を高めようと運動を繰り返してきた。しかしながら、最初に触れたように、黒人が白人警察官によって何の理由もなく射殺されるなど黒人に対する差別的な思考が依然として残っているのが現状である。

では、この現状を良くすることはできないのだろうか。また、良くするためにはどうすれば良いのだろうか。この問題を考えたとき、実際に白人だけの問題であるか、と問われれば、人種のサラダボウルとも呼ばれる米国で

あるだけに我々日本人も考えるべき問題であるだろう。ましてや第二次世界大戦後、米国の支配下となったこともある日本は現在に至るまで、少なからず米国の文化や思想の影響を受けてきたのだ。思い返せば、黒人は凶暴だからあまり近寄らないほうがいい、黒人の多いスラム街は治安が悪い、など黒人に対する差別的な情報は今でも山ほどある。吉田ルイ子氏の『ハーレムの暑い日々』(1979)の中で彼女はフォトジャーナリストとしてニューヨーク・ハーレム取材し、実際に抱かれているイメージと全く違う、黒人たちの人間味あふれる様子を描いている。決して、白人だけの問題ではないという事実について、「黒人に対する差別は、何もアメリカの白人だけのものではない。日本人を含めて、アメリカにいる黄色人種はその殆どが黒人に対する差別意識を持っている。しかも、黄色人種の場合は彼らの日常の生活により近くつながっているだけにより現実的だ。」(p.82)と述べている。彼女のこの言葉の中から黄色人種と言うひとつのくくりがなされているためである。

これまで、米国の黒人差別問題について述べてきたが、米国における黒人差別問題は白人だけの問題ではなく、我々日本人も考えるべき問題であることが分かった。このことから、他人事のように、黒人はかわいそうだ、黒人を差別してはいけない、と言葉だけをならべるのではなく、自分は本当に偏見の目を持っていないか自らを問いただすことが必要であると私は

考える。また、肌の色に関係なく、人間の中身をみて接することが大切であると考え。そして、これは黒人差別に限らず、世界で起こる様々な人種差別においても言えることである。これが世界中で実現されれば、お互いを尊重し合った、差別のない社会へ一歩踏み出せるのではないだろうかとは考える。

#### 参考文献

- ・小川晃（1970）「アメリカ南部のプランテーションと黒人奴隷」『横浜商大論集』、3（2）号、横浜商科大学、pp.12-29。
- ・吉田ルイ子（1979）『ハーレムの暑い日々』講談社文庫、p.82。

#### 宮原さんの喜びの声

この度、この作文コンテストにおいて優秀賞という素晴らしい賞を頂き、大変光栄に思っております。まさか自分がこのような賞を頂けるとは思ってもおらず、驚きと嬉しさの気持ちでいっぱいです。

今回、私が世界の人種差別をテーマにこの作文を書いた理由は、アメリカン・スタディーズという授業の中で人種差別について学び、興味を持ったからです。人種のサラダボウルと言われるアメリカですが、現在に至ってもなお人種差別は大きな問題となっています。黒人差別の始まりから、公民権運動、現在に至るまでのアメリカの歴史を通してアメリカ社会の様々な問題について学びました。そこで私はこの人種差別問題はアメリカだけに限ったことではなく、全世界に共通する問題だと思い、私たちにできることは何かを考えました。

この作文を書いたことは授業で学んだことや自分の感じたことを文章にまとめる非常に良い機会となりました。そして、改めて文章を書くことの楽しさや大切さを学ぶことができました。今回学んだことを今後に生かして、より良い文章が書ける様頑張っていきたいと思います。

#### 【ショートショート部門講評】

ショートショート部門では、本コンテストが求めるショートショートを

「短編小説よりもさらに短い小説。小説としての構成がしっかりしており、話の展開に意外性のある文章」と定義しました。この定義に基づき、「ストーリー構成」「オチの意外性」「表現力・描写力」「語彙力」の4つの観点から審査を行いました。特に、予想を裏切るような結末であるか、およびその結末に向かってストーリー内に伏線がうまく張られているかを中心に評価しました。

今年度は、応募総数が6作品でした。全体として、場面をイメージできるような「表現力・描写力」や言葉選びのセンスを問う「語彙力」には工夫がう

#### ショートショート部門・優秀賞 「孫引き」

福市彩乃さん（関西大学文学部3年）

かがえました。しかし、ストーリー構成やオチが難解でわかりにくい作品や、ショートショートというよりは日常生活を描いたエッセイとも読めるような作品が散見されました。その中でも、オチの意外性を評価できるものが複数ありましたが、オチのインパクトの強さや文章表現上の秀逸さの点で、最優秀賞とするには今一歩及ばず、慎重に議論を重ねた結果、優秀賞1作品を選出するにとどまりました。

優秀賞の福市さんの作品「孫引き」は、タイトルからは想像できないかわいらしい展開を見せてくれる作品でした。先述した4つの観点でバランス

よく評価されたとともに、大学生にとって必須である論文・レポートの書き方における重要事項と大学生の日常生活とをうまく結びつけたアイディアが高く評価されました。まさに本コンテストに相応しいショートショートと言えるでしょう。ただし、「孫引き」の定義については、「Bさんに言及せずに」よりも「Bさんの言及に直に当たらず」などの方が適切かもしれませんね。

それでは、入賞作品と喜びの声をご覧ください。

## 【ショートショート部門優秀賞】 孫引き

関西大学文学部 3 年 福市彩乃

俺達の界限で、要約というのは論文の中でも一番大切な部分だと言われている。それ故か、我々が心理学専修の首位である彼女は、数多の言葉で形容できるだろう俺の性格を一言で言い表して見せた。

「君、神沢湊は儉約家であると考えられる（鹿野，2016）。」

「……なんだ突然」

授業終わりの二人きりの教室でそんなことを言い出したのは、俺と同じ心理学専修足立ゼミ三回生の鹿野青葉だ。

中学生のころから心理学を勉強しているという彼女は、それに感化されすぎて口調が論文調になっている。そう、「（鹿野，2016）」なんて変な言い回しは、論文内で引用を表す文言だ。これはつまり、「鹿野が2016年に言うことには」という意味だ。もはや「私」という一人称を使うことさえも忘れてしまったらしい。

「いや、確かに俺は自分でも、ケチかな一つって思ってるけど、はたから見てもそうなのか？」

「根拠として、質問紙のミスコピーをメモ用紙にしようと大量に足立先生からもらって帰ったことがあげられる（鹿野，2016）。」

「ちょっと待て、何で知ってんだよ！あれは一年の時にオフィスアワーでこっそりと……！ ま、まさかのぞいてたのか！？」

「案ずるな、孫引きだ。足立先生（2014）による。」

俺は脱力した。つまり、足立先生が鹿野にもらしたってことか。

孫引きというのは、例えば A さんが B さんの言葉を借りて言った言葉を C さんが引用したいとき、B さんに言及せず A さんが言ったこととして C さんがそれを引用してしまうことだ。今の例では、足立先生に言及せず鹿野が言ったこととして引用形に表した。良い学生はやっちゃいけないことである。

「かつこ悪いとこ見られたな一……。」

「大丈夫、悪いことではない（鹿野，2016）。」

鹿野はいつもの無表情でそう言って、続ける。

「また、実験参加者の報酬として足立先生に買うよう頼まれた菓子も、スーパーで値下げされたワゴンのものを買った……このことも君が儉約家であることを裏付けている（鹿野，2016）。」

「ぶっ！？」

思わずふきだした。

「ま、まさか、それ、足立先生にばれて……！？」

そんなばかな、20%引きシールは丁寧にはがしたはず……！

「案ずるな、天田ゼミの村田（2015）による。村田（2015）によると、スーパーでちょうど君を見かけた時にその所業を見たとのこと。」

「出典を明らかにしろよ、心臓に悪いな！ 足立先生が言ったのかと思ったよ！」

それにしても……そうか、村田のやつに見られてたのか。口止めしないと。あ、でも去年のことだから、もう遅いか？

「さらに、飲み会ではこっそりアルコールの出ないコースを頼んでいる、メール文面は文字数を省くため送り仮名や助詞を抜きすぎて中文のようになっている、毎日五駅分の距離を自転

車で汗だくになって通学している、などがあげられる（鹿野，2016）。」

「誰から聞いたんだっ！」

「順に、足立ゼミ川原（2016）、天田ゼミ村田（2015）、神沢有子（2015）による。」

「会計川原、気づいてやがったのか！ コーラ飲んで酔ったふりしてたの、恥じゃねえか！ 村田、またお前か！ 中文で何が悪い、俺の第二外国語は中国語だ！ そして最後は母！ 鹿野とどういう接点だ！」

「鹿野青葉は神沢有子のメル友である（神沢有子，2014）。」

「いつの間に！？ さては母さん、俺の携帯見たな！？ しかもメル友に、それも2014年って一年の時からかよ！ だめだ、ツッコミが追いつかない！」

一人饒舌にしゃべりまくって、一人勝手に疲れた。

なんだよ、いろんな人にもう吝嗇性格ばれてんじゃないか。そう思うと、もっと疲れた。

息を整えていると、鹿野がおもむろに口を開いた。

「儉約家は浪費家よりも経済的には破綻しにくいと、長所ととらえるべきである（鹿野，2016）。君のような人間は非常に魅力的で、可能ならば家族になることができれば望ましい（鹿野，2016）。」

「大した褒め言葉だな。誰が言ったんだ、それ。誰の引用だ？」

俺が投げかけた質問に。

「今のは孫引きではない。」

「は？」

「鹿野青葉の、直接引用だ。」

初めて女子らしい顔を見せて、彼女はそう言ってふくれた。

### 福市さんの喜びの声

この度は拙作を入選としていただき、審査員の皆様に心より御礼を申し上げます。

私見ですが、二千字という文字数は、人を感動させるには非常に少ない量です。高言にて恐縮ですが、私は携帯小説サイトに一万字小説で入選したことが何度かあります。その時も一万字では足りない、と感じたほどでした。そこで、起承転結を組み立てて伏線を張って、という従来やってきたことをあきらめ、ある日常の一部を切り取った作品に仕上げたのが本作品です。

本文にも書かれていますが、心理学の論文における引用の表し方は特徴的です。この特殊性を、いつか小説に活かしたいと思っていました。が、それをミステリーのトリックに落とし込むのも難しければ、単なるキャラクターにするのも際立たせるのが難しく、書きあぐねていたネタでした。

きっとゼミの先生が今回の作文コンテストについて教えてくださいなれば、日の目を見ることのなかった題材であったでしょう。先生に知らされた時はもう締め切りが次の日に迫っていて、帰ってから三時間で書き上げた作品となりました。諦めなくて本当に良かったと思っております。この場をお借りして、先生に御礼を申し上げます。

これからも文章力や創造力の面で邁進していきたいと思っております。

### 【編集後記】

入賞作品は以上です。ご応募くださった学生のみなさん、ご指導くださった先生方に、心からの感謝を申し上げます。

最終回となった今年度のコンテストでは、応募資格を全国に拡大しました。その結果、関東地方の大学からもご応募いただき、主催者としてたいへんうれしく思いました。そして、大学生のみなさんの中に「何かを良くしたい」という熱い思いや、文学的な文章に対する創作意欲があることを強く感じました。本コンテストが、自分の考えを文章として表現し、発信する「考動力」を体現する場として、ささやかながら機能できたと自負しています。今後も、学生のみなさんには「考動力」を高めるために、文章を書くことをはじめ、さまざまなことに挑戦していただきたいと願っています。

最後に、入賞作品と喜びの声の掲載にあたっては、作者の意思を尊重し、こちらでの編集は最低限にとどめさせていただきました。掲載した文章は、ほぼ原文どおりであることを申し添えておきます。

### 平成28年度「考動力」作文コンテスト審査員

田中俊也（教育開発支援センター・センター長、文学部教授）

中澤 務（本取組責任者、文学部教授）

岩崎千晶（教育推進部准教授）

小林至道（教育推進部特別任命助教）

毛利美穂（教育推進部特別任命助教）

西浦真喜子（教育推進部特別任命助教）

ライティングラボ TA

上田一紀

内田龍之介

小田直寿

狩野博美

黒澤 暁

小林祐也

齋藤鮎子

阪口紗季

塩見 翔

日並彩乃

林田定男（神戸市立工業高等専門学校講師、教育開発支援センター研究員）

千葉美保子（教育推進部特別任命助教）

佐々木知彦（教育開発支援センター研究員）

木元隆文（学事局授業支援グループ）

竹中喜一（学事局授業支援グループ）

宮田 将（学事局授業支援グループ）

廣瀬有哉

福永健一

森川智晶

山下裕樹

山田和哉

吉崎雅基

吉田直人

吉田由似

米村恵吾

本コンテストは今年度で最終回となります。ありがとうございました。

## 平成 28 年度「考動力」作文コンテスト・表彰式の様子

平成 29 年 3 月 17 日（金）、関西大学千里山キャンパス第 1 学舎 1 号館 5 階のライティングラボ 1 にて、「考動力」作文コンテストの表彰式を行いました。入賞者のみなさん、ご参加くださりありがとうございました。

表彰式は、関西大学教育開発支援センター・センター長の田中俊也教授による表彰状と賞品の授与（高校生の部）、本取組責任者の中澤務教授による表彰状と賞品の授与（大学生の部）、お二人の先生方からの祝辞、伊丹市教育委員会からの講評の紹介と進み、最後に全員で記念撮影をして閉会となりました。

大学生の部の表彰をされた中澤教授は、今年度の大学生の部の入賞者全員が、先生ご自身も所属される文学部の学生であることに触れつつ、お祝いの言葉を贈られました。入賞者の方々は、それを真摯に聞いておられました。



入賞者のみなさん、  
おめでとうございます！



関西大学教育推進部・ライティングラボ

〒564-0073 大阪府吹田市山手町 3-3-35

[E-mail] [wlabo@ml.kandai.jp](mailto:wlabo@ml.kandai.jp)

[URL] <http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/labo/>